

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520772

研究課題名(和文) 藤樫準二文書の研究 皇室記者と宮内官僚の関係をめぐって

研究課題名(英文) A Study of Togashi Junji's Papers: the Relationship between Newspaper Correspondents and Imperial Household Officials

研究代表者

森 暢平(MORI, Yohei)

成城大学・文芸学部・准教授

研究者番号：20407612

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究グループが発見した皇室記者、藤樫準二が残した文書を利用し、象徴天皇制/象徴天皇像が形成・変容・定着する過程におけるマスメディアおよび皇室記者の役割の解明を行った。敗戦後、天皇制を維持するために宮内当局は積極的に皇室記者を活用する。皇室記者の側でも天皇制の「民主的」な側面を積極的に描き「象徴」へと変化した天皇制のイメージ形成に貢献することになる。宮内官僚とマスメディアの共同作業は、戦後巡幸、女性皇族のイメージ形成、美智子妃ブームなどでも同様に見られた。しかしながら、宮内庁は次第に皇族の露出過多には過敏になっていき、開かれた皇室を求めるマスメディアの意図と対立する場面も生じるようになった。

研究成果の概要(英文)：This research, utilizing the papers of Togashi Junji, an Imperial Household correspondent for Mainichi Shimbun, which our research group has found, reveals the role of mass media and reporters in the process of the formation, the modification, and the establishment of the symbolic Emperor system.

After WW2, in order to maintain the Emperor system, Imperial Household officials tried to highlight the humane and liberal aspects of the imperial family and make use of correspondents who wrote favorable articles to contribute to the formation of new images of the family.

The collaboration of the Imperial officials and reporters was also seen in the events such as the imperial tour of Emperor Showa, the marriages of young princesses, and the marriage of the Crown Prince Akihito and Shoda Michiko. However, the Imperial officials gradually changed: it prevented too much exposure of the imperial family and sometimes had friction with mass media which demanded more access to the family.

研究分野：メディア史、歴史学、社会学

 キーワード：象徴天皇制 天皇・皇后 皇太子・皇太子妃 皇族 マスメディア 皇室記者 ジャーナリズム 新聞
・雑誌

1. 研究開始当初の背景

本グループは、マスメディアの報道が、象徴天皇制/象徴天皇像の形成・変容・定着する過程において、どのような影響があったのかという問題意識をもとに、同じ関心をもった研究代表者、および2人の研究分担者が、皇室記者について研究することで一致したことからはじめた。資料を探したところ、毎日新聞の皇室記者であった藤樫準二(1897 - 1985)が残した藤樫準二旧蔵文書が、遺族のもとに残されていることが分かり、それを借り受けることになった。

2. 研究の目的

本研究グループは、藤樫準二旧蔵文書を利用し、その整理を行うことが第一の目的であった。そのうえで、同文書を用いて、象徴天皇制/象徴天皇像が形成・変容・定着する過程におけるマスメディアおよび皇室記者の役割を解明しようとした。その際、同文書だけに頼るのではなく、日本新聞博物館所蔵の藤樫資料、その他、宮内公文書館をはじめとする各地の公文書資料、雑誌記事等を利用することとした。具体的には、A) 天皇の退位と留位をめぐる宮内庁、政界の動向、(B) 皇居・宮殿再建をめぐる宮内庁、政界の動向、(C) 新しい役割としての外遊 1971年の欧州訪問、(D) 宮内記者会の来歴と機能、(E) 宮内記者と宮内官の相互関係 戦後巡幸をめぐる、(F) 宮内記者と宮内官の相互関係 皇太子像の創出をめぐる、の6点のテーマを上げた。

3. 研究の方法

- (1) 藤樫旧蔵文書の中の、取材メモの一部を文字起こしするほか、日程帳を分析し、藤樫の行動を把握・分析する。藤樫旧蔵文書のなかにこれまで把握できていなかった雑誌記事、新聞記事がないかを精査する。
- (2) 日本新聞博物館所蔵の藤樫資料についても、取材メモ17冊を中心に調査する。
- (3) 『新聞及び新聞記者』『日本新聞報』『新聞協会報』『文化通信』などのジャーナリズム関係の資料について調査し、戦前・戦後の宮内省/宮内府/宮内庁とメディアの関係の記事を精査する。『東京日日新聞』『毎日新聞』の社報を、毎日新聞東京本社情報調査部の協力を得て、調査する。
- (4) 上記の方法で、藤樫に関する基礎資料を収集整理したうえで、宮内公文書館など各地の公文書館資料と合わせ、個別のテーマについての調査を進める。

4. 研究成果

- (1) 皇室記者の活動と記事に関する論文作成(雑誌論文)
象徴天皇制確立において重要な意味を果たした皇室記者の活動および彼らが執筆した記事に関する論文を作成した。敗戦後、天皇制を維持するために宮内省は積極的に皇

室記者を活用した。彼らは天皇制や天皇の「民主的」な側面を積極的に描き、それが「象徴」へと変化した天皇制の人々のイメージ形成に寄与していく。皇室記者にとっては、戦前から敗戦後への自らへの宮内省の待遇改善が「民主化」の表象となった。それゆえに積極的に宮内省と協調していく。今後は、さらに史料を発掘するとともに、その後の展開についても明らかにすることが課題である。

(2) 敗戦直後の内親王結婚とメディア報道についての論文作成(雑誌論文)

昭和20年代、孝宮・順宮という2人の内親王が結婚した。これまでの研究がほとんど注目しなかったこの結婚について、本研究は、月刊女性誌の記事を中心に分析。結婚の「平民」性と「恋愛」感情が重点的に報道されたことに注目した。「平民」という言葉が使われたのは、皇室が「私たちと同じ」であるまでに民主化した、あるいは、私たち「平民」の憧れとしての皇室を見たいという欲望を反映していた。民衆側が皇室に「平民」的なものを望み、雑誌報道がそれを反映していたのである。恋愛については、当時の社会状況が、「見合い」と「恋愛」の中間的な在り方を模索していたことと大いに関係していた。「見合い」でも十分な交際を経て結婚するのが民主的だという規範を受け入れた人びとが、皇室の結婚にも、「恋愛」的な要素を見ようとしたのだ。さらに、民衆は、内親王の結婚に自らの生活向上への希望をも読み込んでいた。マスメディア報道はこうした民衆の欲望を映し出していたのであるが、本研究は、質素さを強調したかった宮内当局の意向とはズレがあったことも指摘している。すなわち、宮内当局とマスメディアの意図は必ずしも一致していたわけではないのである。この研究は、のちの美智子妃ブームにおけるマスメディア報道、占領期とポスト占領期の連続と断絶を分析するうえで整理を行ったと意義付けることができる。

(3) 宮内庁の組織変遷についての論文作成(雑誌論文)

戦後巡幸の期間の宮内庁の政治的地位の変化について考察する論文を作成した。

宮内省は、「宮中・府中の別」にのっとり、独自の予算を運用し、政府からの独立性を保ってきた。しかし、敗戦後のGHQの改革によって、皇室財産が解体されて皇室予算はすべて国庫からの支給となり、天皇の政治的権限も剥奪された。これに沿って宮内省も縮小されて宮内府となり、敗戦時と比較して半数以上の部署が削減され、人員は約25%にまで縮小された。しかし、吉田茂首相などの尽力によって、宮内府には政府の統制が必ずしも及ばない余地が残された。

その後、昭和天皇の戦後巡幸での大量の予算使用の問題や日の丸掲揚問題をきっかけとして、GHQの民政局や片山・芦田首相のイ

ニシアティブによって、さらなる組織改革と幹部の更迭が行われた。その結果、宮内府は宮内庁へと改組され、機関としての独立性を失い、「宮中」は「府中」に従属することとなった。その結果、宮内庁は内閣のコントロールの下に置かれることとなり、次第に天皇の政治利用を食い止めることができなくなっていった。天皇が「保守政治の従属変数」であった以上、宮内庁もまた政府の従属機関にならざるをえなかったのである。

本論文の意義は、これまで具体的に論じられてこなかった宮内省から宮内府、宮内庁への変遷過程を、宮内庁の公文書などを使って分析し、宮内庁が具体的にどのような政治的な役割を果たすことが可能な組織であったのかを明らかにした点である。これによって、戦後巡幸における宮内庁の役割、政府との関係、マスメディア報道の規範などを分析する前提が整った。

(4) 敗戦直後の皇后イメージに関する論文作成（雑誌論文）

敗戦後、皇后（香淳皇后）には、「母」と「妻」の2つのイメージが存在していた。前者は戦前からの「国母」のイメージの継続・残存であったが、戦前の「母」との相違点は、「人間」としての皇族の側面をアピールすることに重点が置かれた。人びとの理想的な家庭像の中での、理想的な「母」という役割が皇后に与えられ、天皇家が一般の家庭と同じような雰囲気を持っていることが、マスメディアを通じて流布した。第二の「妻」イメージも、同様に、「人間」としての側面を描き出す意味を持っていた。戦前のような家族制度が廃止された後の、新たな夫婦関係を示すものとして捉えられていたことである。その意味で、イメージを流通させたマスメディアは、新しい時代状況により適合した像を構築していたと言える。こうした皇后の外見やイメージは敗戦直後から一定程度の時期、好意的に受容されていたが、講和独立や経済状態が好転化してくる中で、イメージ自体が古くささを感じさせるようになっていく。

敗戦直後の皇后像は、「人間」的な象徴天皇像を人々に定着させることの大きな要因になったが、「文化平和国家」の表象としての存在として象徴天皇が据えられていく過程の中で、「新生日本」を示したいという人びとのナショナルな意識を満たすことができなくなるのである。

本論文は、敗戦直後の皇后イメージが果たした役割を、マスメディア報道の丹念な分析を通じて明らかにしたところに意義があり、その後の新しい皇太子や皇太子妃像との変容の研究に接続していくものである。

(5) 戦後巡幸概説の論文作成（図書『戦後史のなかの象徴天皇制』所収「象徴天皇制における行幸 昭和天皇『戦後巡幸』論」）

日本国憲法の象徴天皇制の下での行幸の

あり方を問うために、「戦後巡幸」の概説的な論文を作成した。

戦後巡幸は昭和天皇の戦争被災者への慰問を目的として開始された。受け入れる民衆も、戦前とは異なって直接声をかけてくる天皇の姿に感動し、天皇を好意的に受容していった。しかし、次第に規模が拡大してくると、目的に沿わないお祭り騒ぎのような状況が各地で起き、それを宮内官は止めることができなかった。また、多額の行幸費用や行幸時の宮内官の態度などが原因で、マスメディアや民政局からは「非民主的」として批判が強まっていき、巡幸は中断に追い込まれることになる。

1949年に戦後巡幸は再開されたが、改革によって権限を奪われていた宮内庁は、政府に従属して行幸を運営するだけの機関となった。そして当初の目的が後景に退き、国民統合や反共政策などに政治利用されることが多くなっていった。そして、国民体育大会や全国植樹祭といった毎年各都道府県が持ち回りで行う行事への天皇の行幸が定例化した。

これらの行幸の際には奉迎への動員なども盛んに行われ、奉迎に参加するかが天皇制支持の踏み絵となった。しかし、露骨な政治利用への民衆からの反発も強く、天皇が親しみを感じさせる「人間」として認識されることが国民からの支持に不可欠な要素となっていた。

本論文の意義は、象徴天皇制における行幸の政治的な役割を明らかにした点である。巡幸は戦前の神格化された天皇像から、「人間」として親しみのある姿への転換を民衆に受容させる役割を果たした。また、その結果として、天皇は常に「国民とともにある」姿を見せざるをえなくなった。政治利用への反発は、特にマスメディアによる批判が中心となっており、マスメディアの報道のあり方に宮内庁や政治家が拘束されることになったのである。

(6) 弟宮のイメージと実態に関する論文作成（図書『戦後史のなかの象徴天皇制』所収「戦後皇族論 象徴天皇制の補完者としての弟宮」）

昭和天皇の弟宮である秩父宮・高松宮・三笠宮に関する研究を行った。敗戦後の新聞雑誌などに描かれるイメージや彼らの思考を明らかにするとともに、実際の行動を公文書などから確定させることで、そのイメージと実態を総体的に解明し、論文を作成した。自らの苦悩を吐露して「人間」的な側面を見せる秩父宮、積極的に外に出て行き「民主化」を体現する高松宮、学究的な態度を示し戦前を否定する三笠宮。それぞれのイメージと実態が象徴天皇制確立に果たした役割を明らかにした。今後は、1950年代以降の象徴天皇制展開過程におけるそれぞれの役割を解明することが課題である。

(7)美智子妃ブームとマスメディア報道に関する論文作成(図書『戦後史のなかの象徴天皇制』所収「ミッチー・ブーム、その後」)

明仁皇太子と美智子妃の結婚が決まった1958年、恋愛結婚の比率も、施設内分娩もまだ低いがその後の上昇が見込まれ、経済成長と社会変動を実感できる時代であった。大正期からはじまった大衆社会状況が、農村部でも広がりをはじめ、封建的なしがらみのなかで生活していた農村青年たちは新しい自由な暮らしに憧れをもった。時代の空気と美智子妃の平民イメージがシンクロしたことで空前のブームが起きたのである。

ただし、民衆は、メディアを通じた皇室像をただ盲目的に追従するだけの存在ではなく、美智子妃の行く末を一方で冷静に見つめ、「雲の上」の人になってしまうのではという懸念ももっていた。そうした心配は出産後の「お瘦せ」で現実となり、第2子流産とその後の長期静養で決定的になる。美智子妃をそっとしておいてという世論、過剰報道の反動のぞき見報道への批判などさまざまな条件のなかで、マスメディアによる美智子妃報道は減少していく。さらに、急激な高度経済成長は、日本を豊かにし、皇太子夫妻の新しいイメージを劇的に陳腐化していく。恋愛結婚、自家用車でのデート、電化生活、病院での分娩、文化的な台所など、ブームのとき、民衆が憧れていたものがありきたりとなってしまふ。

本研究は、皇太子妃イメージが、急激な社会変動のなかで消費されていくことを丹念に実証したことに意義をもつ。今後、皇室イメージの消費の連続と断絶をより多面的に研究することが課題となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

河西秀哉、「敗戦直後の天皇制の危機とマスメディア」、Juncture:超域的日本文化研究、査読有、6号、2015、86-99

森暢平、「昭和20年代における内親王の結婚:『平民』性と『恋愛』の強調」、成城文藝、査読有、229号、2014、50-24

<http://www.seijo.ac.jp/pdf/fal/it/229/229-1.pdf#search=%E6%98%AD%E5%92%8C20%E5%B9%B4%E4%BB%A3%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E5%86%85%E8%A6%AA%E7%8E%8B%E3%81%AE%E7%B5%90%E5%A9%9A%E5%BC%9A%E3%80%8E%E5%B9%B3%E6%B0%91%E3%80%8F%E6%80%A7%E3%81%A8%E3%80%8E%E6%81%8B%E6%84%9B%E3%80%8F%E3%81%AE%E5%BC%B7%E8%AA%BF%E3%80%8D>

瀬畑源「『宮中・府中の別』の解体過程 宮内省から宮内府、宮内庁へ」、一橋社

会科学、査読有、5巻、2013、1-28

<https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/bitstream/10086/25793/3/shakaikg050100010.pdf>

河西秀哉、「天皇制と民主主義:敗戦直後の知識人における天皇制擁護の実相」、Notre Critique: History and Criticism、査読有、6巻、2013、2-17

河西秀哉、「国民国家と天皇制:『元首』と『象徴』」、福音と世界、査読無、68巻10号、2013、8-13

河西秀哉、「敗戦後における皇后イメージ」、女性学評論、査読無、27号、2013、21-39

http://ci.nii.ac.jp/els/110009558607.pdf?id=ART0010004995&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1434181710&cp=

河西秀哉、「近現代天皇制研究の現在」、歴史評論、査読無、752号、2012、25-35

〔学会発表〕(計6件)

河西秀哉、「戦争責任論と象徴天皇制」、歴史学研究会近代史部会準備会、2015年3月27日、明治大学(東京都千代田区)

瀬畑源、「昭和天皇『戦後巡幸』 長野県行幸(1947年)を例として」、長野県近代史研究会秋季大会、2014年11月15日、長野市南千歳公民館(長野県長野市)

森暢平、「昭和20年代における皇室の婚約・結婚報道」、象徴天皇制研究会、2014年2月25日、成城大学(東京都世田谷区)

河西秀哉、「戦後皇族論 昭和天皇の新たな『藩屏』たち」、象徴天皇制研究会、2013年3月17日、東京大学大学院総合文化研究科(東京都目黒区)

森暢平、「ミッチーブーム、その後」、象徴天皇制研究会、2013年2月9日、東京大学大学院総合文化研究科(東京都目黒区)

瀬畑源、「昭和天皇『戦後巡幸論』」、象徴天皇制研究会、2012年9月15日、東京大学大学院総合文化研究科(東京都目黒区)

〔図書〕(計1件)

河西秀哉・後藤致人・瀬畑源、富永望・舟橋正真・楠谷遼・森暢平、吉田書店、戦後史のなかの象徴天皇制、2013、273(1-23、47-80、143-169、203-234、240-242、251-272)

6. 研究組織

(1)研究代表者

森暢平(MORI, Yohei)

成城大学・文芸学部・准教授

研究者番号: 20407612

(2)研究分担者

瀬畑源(SEBATA, Hajime)

長野県短期大学・助教
研究者番号：10611618

河西 秀哉 (KAWANISHI, Hideya)
神戸女学院大学・文学部・准教授
研究者番号：20402810